

考古発見の中国古紙本絵画に関する一考察

《キーワード》書画支持体 宴飲図と出行図

王 元 林

はじめに

紙本絵画は絵画表現上最も重要な形式の一つである。絵画に反映された主題を感じ取ることを目的とする場合は大画面の壁画に及ぶものはないが、紙本は現存する絵画の支持体として質量共に他の物に勝っており、その上保存にも比較的適している。中国は製紙法の発祥地であるため、紙上に作画することにおいても当然長い歴史を持つている。本稿は考古学上の紙画の発掘成果とこれまでの先行研究を踏まえて、古紙と紙文書の発見について順を追っていき、そこから中国古紙画の発生、発展及び他の支持体を用いた絵画との相関問題を考察しようとするものである。

一・書画の支持体変化の流れ

製紙法は中国古代四大発明の一つである。紙の発明以前の非常に長い時間、人類は多くの材料に字を書き、物事を記録していた。文献と発掘資料により、最初期の人々は縄を結ぶことで物事を記録し

ていたことが分かる。それは事が発生すると結び目を作り、それが終わると解くというやり方であった。殷・周代(前二六〇前三世紀)になると既に文字は成熟したものとなるが、紙は未だ存在せず、人々は文字を記録するための様々な方法を考え出した。第一に考え出されたのが亀甲や獣骨上に文字を彫り刻む方法で、これによる所謂「甲骨文」が、中国において現存最古の文字が記載された書面である。また商代以降の青銅が製造されるようになるなかで、青銅器を鑄造する過程で文字を刻む彝器銘文即ち「金文」或いは「鐘鼎文」も生まれた。春秋戦国時代以後には、簡牘・縑帛といった文字記載用に新しい材料が使用されるようになり、文字を竹片或いは木片上に書いたものを竹木簡牘と一般に呼ぶ。他に秦代以前には以上の記事材料以外、「石鼓文」に代表されるように石も文字を記すものとして活用された。このように古代中国における記事材料としては、陶器、甲骨、金石玉器、竹木簡牘、縑帛といったようなものが存在した。しかし、甲骨、金、玉、石などは表面が硬い上に重くかさばるため、写字・閲読、運搬や保管に適さなく、あまり記事材料としては長く使用されることはなかった。それに対して竹木簡牘、縑

帛は春秋戦国時代以降、写字支持体として主流になっていった。中でも縑帛は絵画を描くものとしても活用された。

時代を経て社会文化が発展し、生産力が向上すると共に、写字の支持体探求も続けられ、ついには理想の支持体を発明するに至った。それこそが紙である。前代では主流であった簡牘・縑帛はそれぞれ厚さがあり重い、高価であるという理由で徐々に時代の要求に應じられなくなり、前漢（前二〇六～二五）初からは写字、運搬に適する紙に取って代えられる兆しが見え始めた。一九八六年六月から九月にかけて発掘された前漢早期の文帝、景帝期（前一七九～前四一年）の甘肅天水放馬灘墓から出土した古紙「放馬灘紙」（甘肅省文物考古研究所蔵）（図1）は、現在のところ世界最古の地図であり世界最古の植物纖維紙である。¹この紙片は滑らかで艶やかな紙面を有しており、そこには細い墨線で山川や道路が描き込まれている。紙は両漢時代（前二〇六～二二〇）、書の支持体として未だ簡牘・縑帛の副次的な立場に甘んじていたが、西晋（二六五～三一六）以降、製紙技術の進歩及び需要の増加により簡牘・縑帛の位置に追いつき、そして東晋（三

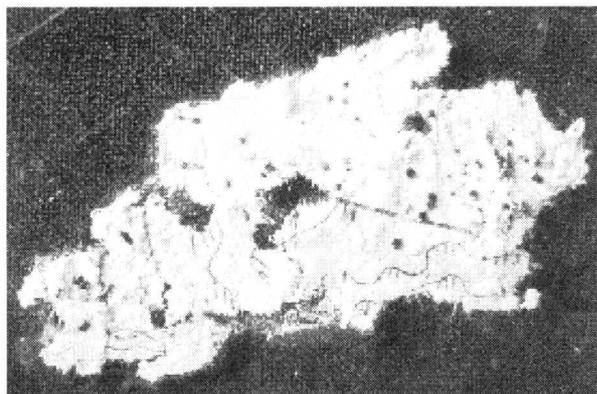


図1 紙本地図 前漢・約前150年 紙本墨画
5.5×2.6cm 甘肅省天水市放馬灘前漢墓出土
蘭州市、甘肅省文物考古研究所蔵

一七～四二〇）中・後期にはついに簡牘・縑帛に取って代わった。²魏晋南北朝時代（二二〇～五八二）の文人によって詠われた紙についての詩文は少なくなく、晋代傅咸の「紙賦」³、南朝梁代肖繹の「咏紙」⁴などは有名である。

二. 古紙、紙本文書の発見と伝世の紙本書画

二十世紀開始以来、新疆、甘肅、陝西などの地域で両漢時代の古紙残片が数十片出土した。新疆楼蘭、吐魯番、内蒙古エチナ漢代亭燧遺址、敦煌漢代駅烽燧遺址、敦煌莫高窟藏経洞などでは、漢代から唐代に至る多くの紙本文書と経巻も発見された。その中には漢晋時代の精美な作品も少なからず含まれていた。以下それらの作品のうち、特に重要なものについて概述することとする。

（一）敦煌駅烽燧遺址出土の漢晋文書

敦煌発見の漢晋紙文書の中で最も著名なものは、懸泉置遺址の出土品である。敦煌甜水井漢代懸泉置遺址は一九九〇年から一九九二年にかけて発掘された。そこから出土した四六〇余点の麻紙のうち文書は十点あり、その時代別内訳は前漢武帝期（前一四一～前八七）、昭帝期（前三三～前七）のものが三点、前漢宣帝期（前七四～前四九）から成帝期（前三三～前七）のものが四点、後漢（二五～二二〇）初期のものが二点、西晋のものが一点といった具合であった。そしてこの前漢武帝期の文書は、現在までに発掘された紙本文書の中で最古のものである。これらの紙文書残片の発見は前漢にあって既に絹、竹、木、紙の四種類の書の支持体が並存していたことを証

明した。⁽⁵⁾

(二) 新疆楼蘭文書

楼蘭遺址出土の紙本文書の年代の上限は嘉平四年(二五二)、下限は建興十八年(三三〇)であり、これはおよそ曹魏(二二〇)～二六五)、西晋、前凉(三一三～三七六)といった王朝が支配していた時期に当たる。⁽⁶⁾ スウェン・ヘディンは一八九九年から一九〇二年の第二回中央アジア探険の際、楼蘭ロプ・ノール付近で西晋三世紀の紙本墨書漢文の『戦国策』残片と手紙残片(双方とも現在スウェーデン国立民族学博物館に所蔵)等⁽⁷⁾を得た。また大谷探検隊も一九〇八年から一九〇九年に及ぶ第二次中央アジア探険の間に、十六国・前凉四世紀の『李柏文書』四一件(龍谷大学大宮図書館蔵)⁽⁸⁾(二件は比較的整っており、残り三九件は残片)をタリム河流域で発見した。そして近年の出土品としては、新疆イリ県インパン六六号墓から出土した漢晋時期二世紀から五世紀の紙本墨書文書(新疆文物考古研究所蔵)⁽⁹⁾が挙げられる。この文書は、西北インド及び中央アジア一帯で使用されていたイラン系のカロシュティー文字で書かれている。

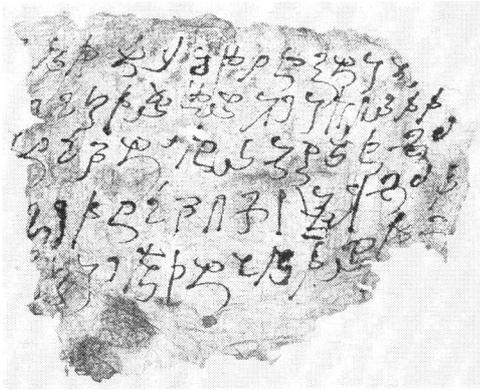


図2 カロシュティー文紙文書 漢～晋・
2～5世紀 紙本墨書 12.0×
93.0cm 新疆イリ県インパン66号
墓出土 ウルムチ市、新疆文物考古
研究所蔵

(三) トウルファン文書と写経

i 文書

十九世紀末から一九七〇年代にかけて新疆ウイグル自治区トウルファンの古墓及びいくつかの故城、石窟遺跡から出土した紙本の写本文書の多くは漢文で書かれているが、ソグド、突厥、ウイグル、吐蕃文等で書かれているものも多数ある。これらの文書はおよそ西晋十六国時期、高昌西州から元代に及ぶ時期(三～一四世紀)に属し、各時代の政治、経済、生活文化等の研究のための重要資料である。その種類は公私文書、古籍、仏道等の宗教経典という四種に大きく分けることができる。⁽¹⁰⁾ 科学的分析によると、魏晋南北朝時期に属すものでは、麻紙を使用しているものが絶対的多数を占めている。このうち比較的早い時期のものとして、一九六五年にトウルファン県英沙(安楽)故城出土の東晋写本『三国志』「孫権伝」残片⁽¹¹⁾(新疆ウイグル自治区博物館蔵)が例として挙げられる。また一九二八年に黄文弼氏がカラホージャの農民から購入した前秦時期の『白雀元年(三八四)物品清單』残片二件(北京、国家博物館蔵)⁽¹²⁾もある。これはもともとは高昌故城から出土したものに違いない。

ii 写経

中国における写経は後漢帝永平一〇年(六七)に始められたと思われるが、当時洛陽において多くの高僧が大量の仏典を翻訳していた。⁽¹³⁾ そして仏典の翻訳、伝播が大いに為された時期であった魏晋南北朝時期には、洛陽、長安、建康等が訳経の中心地であった。当時の仏教写本は紙本が多数を占め、現存最古の仏教写本はトウルファン出

土の西晋竺法護等訳のものである。現存例として日本の知恩寺蔵『聖法印經』や一九一四年に大谷探検隊が新疆鄯善トク溝石窟遺址で得た『諸仏要集經』（旅順博物館、東京国立博物館他蔵）がある。前者には西晋元康四年（二九四）に竺法護が酒泉で訳出した記録があり、後者には西晋元康六年（二九六）の年紀がある。¹⁴

（四）敦煌遺書

敦煌莫高窟藏經洞（第一七窟）から発見された約五万件の敦煌遺書の制作年代は四世紀から一一世紀に及び、そのうち年紀のあるものは一千件近くある。比較的早期、晩期の年紀のある遺書としては、それぞれ西凉建初二年（四〇六）の記載のある『十誦比丘戒本』（S・七九七）、『大宋咸平五年（一〇〇二）敦煌王曹宗寿編造帙子入報恩寺記』（Φ・三二a）が有名である。また東晋咸和年間（三二六～三三七）の『優婆塞戒』残卷、西凉建初七年（四一一）の『妙法蓮華經』残紙等もある。¹⁵

（五）伝世紙本書画作品の略説

北宋米芾の『書史』に「王羲之『来戯帖』、黄麻紙。」という記載がある如く、文献によると書法家の西晋陸机（二六一～三〇三）、東晋王羲之（三二一（？）～三七九（？））等は皆麻紙を以て揮毫していたという。現存紙本書跡の中で比較的制作年代の早い陸机の章草『平復帖』はまさに白麻紙上に書写されており、他に魏晋南北朝期の麻紙本伝世作品としては『三希堂法帖』において誉め称えられている王羲之『快雪時晴帖』、王献之（三四四～三八六）『中秋帖』、王珣（三五〇～四〇一）『伯遠帖』（三作品共に北京の故宫博物院所蔵）等が挙げられる。

唐時代（六一八～九〇七）になると、紙を用いて作画することが次第に多く行われるようになる。唐代の伝世紙本絵画のうち真筆であるものの多くは比較的後の時期のものであるが、その中で割合早い時期のものとして唐代有数の著名画家である韓滉（七二三～七八七）の「五牛図」（北京、故宫博物院蔵）¹⁷等がある。そしてこの「五牛図」もまた麻紙を用いているのである。

以上前漢から西晋十六国時期までの紙本の公私文書、仏教写経及び伝世書画作品をみてきた。

古紙の大量発見とそれに関連する文献の記載は、以下の事実を証明する。①前漢時期には大概、紙は梱包等に用いられ、前漢中晩期、後漢初から徐々に書の材として使われるようになった。②紙が人々の生活において多岐にわたる目的で使用された。③魏晋時期において紙画が出現した。④製紙技術の継続的な進歩が、魏晋時期以降に繁栄した書画芸術に対して幅広い舞台を提供した。

本稿で取り上げる考古発見の紙本品、とりわけ乾燥気候の河西や新疆等の石窟、古墓等の遺跡から出土した漢魏時期の紙本文書、写経と絵画はこれらの事実を証明するための絶好の例証である。

三．古紙本絵画の発見及び研究

前述の通り二十世紀初めから一九七〇年代にかけて新疆トゥルフアン地区の古墓から多く出土した紙本絵画には、唐代西州時期（六四〇～七九〇）のものも含まれていた。¹⁸その中の代表として、カラホーージャ古墓群出土の唐開元四年（七一六）の紀年を有する文書

の裏に描かれていた「樹下人物図」（東京国立博物館蔵）、一九六九年出土の「花鳥画」（新疆维吾尔自治区博物館蔵）、「樹下美人図」（静岡、MOA美術館蔵）及びインドのニューデリー等に散在している「伏羲女媧図」等が挙げられる。また敦煌莫高窟藏経洞からも唐宋時代の紙本絵画が少なからず発見されており、それらはイギリス、フランス、ロシア、日本等に散在しており、ロンドンの大英博物館、パリのギメ博物館等に所蔵されている。その中で著名な作品として「騎馬人物図」（ギメ博物館蔵）¹⁹⁾等がある。

以下現在までに発見された紙本絵画の最古のもの、すなわち西晋から十六国時期の作品（考古発見の中国古紙本絵画作品略表を参照）について考察していきたい。

(二) 一九七〇年代以前発見の古紙本絵画

トゥルファン地区では高昌時代（五〜七世紀中頃）に仏教芸術が大いに制作されたが、世俗生活を反映した作品は多く作られなかった。しかしトゥルファン・アスターナ古墓群からは多くの非仏教世俗芸術品が出土し、特に絵画作品は西域その他オアシス文化を表象する芸術作品として大きな価値を持つ。

アスターナ古墓群出土の絵画には、晋代から唐代に至る数百年の間に制作された紙本作品、絹本作品、壁画がある。壁画には「樹下人物図」屏風、「花鳥図」屏風及び莊園生活を反映した画等多くのものがある。これらの画は一墓中に共存しており、全て合わせることで古代トゥルファンの世俗生活を生き生きと表現する巨大な図巻を構成する。紙本の数は極めて少ないが、そこには古代トゥルファンの世俗生活を直視した画が描かれ、画題としては莊園生活、宴飲

表1 考古発見の中国古紙本絵画作品略表

出土墓名	発見年代	材質, 彩色, 技法	画題	法量	制作年代	参考文献
トゥルファン アスターナ第 二区1号墓	1915年	紙本(麻紙)着色, 彩色:赤、白、緑、 黒、灰等 鉤勒填彩	宴飲、厨事	26.8× 87.2cm	西晋十六 国(3世紀 末~4世紀 前半)	STEIN (Aurel), <i>Innermost Asia</i> , 3vol., Oxford, 1981.
トゥルファン アスターナ第 六区3号墓	1915年	紙本(麻紙)墨画 淡彩 彩色:赤、茶褐色、 緑	宴楽、厨事、 牛車	44.8× 52.0cm	西晋十六 国(3世紀 末~4世紀 前半)	STEIN (Aurel), <i>Innermost Asia</i> , 3vol., Oxford, 1981.
トゥルファン アスターナ13 号墓	1964年	紙本(麻紙)着色, 彩色:赤、茶褐色、 黒 鉤勒填彩	地主生活図: 燕居、厨事、 農事、鞍馬等	46.2× 106.5cm	西晋十六 国(3世紀 末~4世紀 前半)	新疆维吾尔自治区 博物館「吐魯番県阿 斯塔那-哈拉和卓古 墓群発掘簡報」, 『文物』1973年第10 期, 7~27頁。
玉門官庄1号墓	2003年	紙本(麻紙)着色, 彩色:黒、黄、 赤等 鉤勒填彩	出行図:牛車、 鞍馬、人物	23.0× 64.0cm	西晋十六 国(3世紀 後半~4世 紀前半)	甘肅省文物考古研究 所「甘肅玉門官庄魏 晋墓葬発掘簡報」, 『考古与文物』2005 年第6期, 10~15頁。

等がある。そして絹本作品には舞楽、囲碁仕女、牧馬等が画題として採用され、それを屏風形式に描いているものもある。絹、麻、紙画の中で出土数が最も多く、最も著名なものは伏羲女媧を画題とした作品である。

次に個々の紙本作品についてみていく。⁽²⁰⁾

i 莊園生活図

一九六四年アスターナ一三号墓より出土した墓主の「莊園生活図」、通称「地主生活図」(図3)は六小紙片をつなぎ合わせて成る縦四六・二cm、横一〇五cmの紙本着色画である。⁽²¹⁾この画は、墓主像を中心に周りに莊園生活のいくつかの場面を配している。各モチーフの配置は割合自由に為されているが、全体の構図はよく整っている。画面中心の墓主は垂飾りをつける覆斗形屋根の帳の中で榻上に乗っており、高冠を戴き、団扇を手に握っている。墓主の横にはその妻或いは侍女と思われる女性が跪坐して控えており、帳のすぐ左と画面の左端にそれぞれ果樹がある。果樹のうち帳脇のものには長尾の大鳥がとまり、二果樹の間には頭をもたげた鞍馬と御者、その後ろに曲蓋、節、麾、幢がそれぞれ描かれる。⁽²²⁾そして画面右側には厨房図と田圃及び農具が表される。また画面右上端の東方の象徴である太陽は中に三足鳥を入れて、反対側の左上端の西方を象徴する月の中に蟾蜍を有している。更に帳端の果樹の上両端には、ほぼ左右対称に北斗七星がそれぞれ描かれている。

この多くのモチーフが描き込まれた画は、天地人間の相互関係と当時の豪族及び官吏達の日月と星の光が輝く空の下での莊園生活の盛況ぶりを表現しているのである。そしてまた、画面全体に溢れる

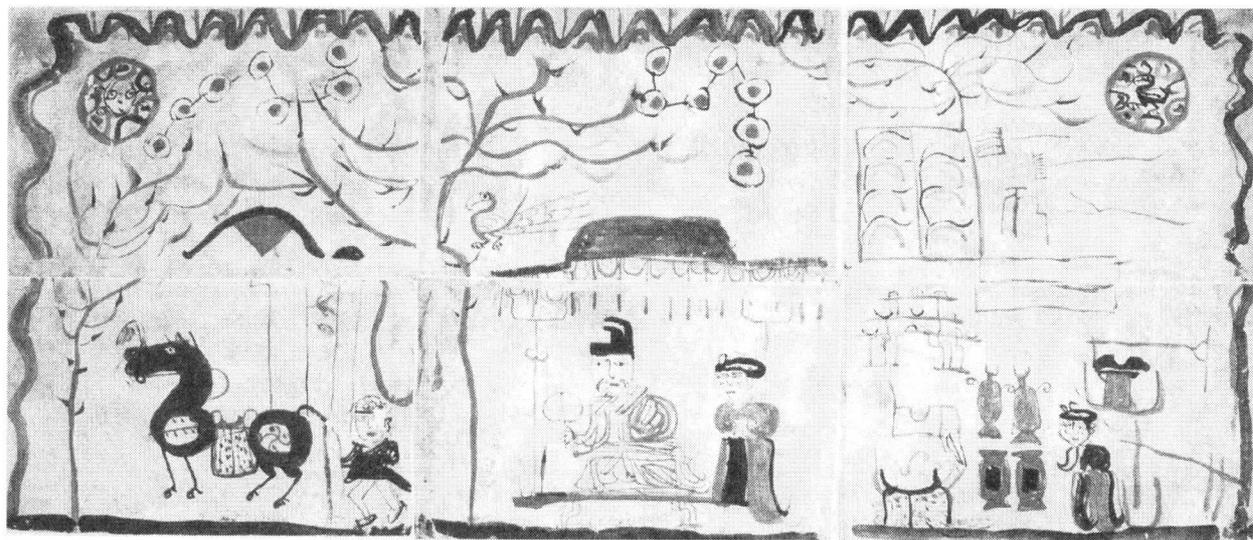


図3 莊園生活図 前凉・4世紀前半 紙本着色 106.5×46.2cm 新疆トウルフアン市
アスターナ13号墓出土 ウルムチ市、新疆ウイグル自治区博物館蔵

富貴享樂及び吉祥と世の中のあらゆるものを求めて止まない豪華な雰囲気は、墓主が生前に安逸かつ平和でめでたい生活を強く望んでいた事を示している。

技法面については線が精緻でないなど全体的に稚拙であり、この紙画の芸術水準は決して高いとは言えない。しかし描き込まれた多くのモチーフは当時の世俗生活を反映しており、画家は栄華、富貴、吉祥を象徴する事物を同一画面に調和を保ちながら入れることに成功している。これによって観者をして空想上の極めて華やかで広大な空間に留め置きしむのである。

孟凡人氏は墓の構造、随葬品、木俑と壁画等を総合して分析した結果、壁画墓の墓主は中原と同様に、皆当地に先祖代々続く豪族家系の者と世襲の官吏であるとした。²³ ここにおいてアスターナ一三号墓の墓主も同様に高位の人物であったと考えられる。そしてまた大量の文献史料によってこの墓主の身分は一般的な地主ではなく、西晋時期のトゥルファン地区州郡の軍政指導者の存在であったことが分かるのである。²⁴

ii 宴飲図

一九一五年にイギリスのオーレル・スタインによってアスターナ古墓群から多くの紙画が発掘され、その中には第二区一號墓出土の紙画の如く「宴飲図」と称すべきものが含まれていた。²⁵ その「宴飲図」は画面左半分に食事の場面を描き、右半分に宴の準備をする厨房の場面を描いている。登場する人物には主人、侍者がいるが、服飾からみて皆女性である。

iii 宴楽図

「宴飲図」と同様に一九一五年にスタインがアスターナ古墓群第六区三號墓から得た紙画（図4）²⁶ は、墓主燕居、宴樂、厨房、田地、牛車等日常生活から取材したものを描いているが、その中心を為す宴樂により「宴樂図」と称される。この「宴樂図」は主人夫婦と賓客の宴を楽しむ様子を表現している。画面は上下に二分されており、上半分には画面上端から垂れる幔の下で団扇を持ちながら榻上に坐る男主人とその後ろに控える女主人が、賓客と対座する様子が描かれている。そして主人と賓客の間には、跪坐して踊るような様子で男主人に酒杯を手渡す侍女がいる。下半分には、厨房図と舞樂図が表される。画面中心で両頬に円状の化粧をする女性が長袖を振り上げて舞い、その脇で二男が簫、鼓で伴奏する。舞女の左には樹木と牛車が描かれ、下には火を熾して宴の準備をする僕人と井戸、



図4 宴樂図 前凉・4世紀前半 紙本墨画淡彩
約44.8×52.0cm 新疆トゥルファン市アスターナ第6区3号墓出土 インド、ニューデリー博物館蔵

調理道具等が描かれる。

この「宴楽図」は前述の「莊園生活図」と表現形式が類似しており、いくつかの人物と景物で成る場面を組み合わせた画面全体で宴飲舞楽の場面を表現する。しかし技法は「宴楽図」の方が優れている。そこには動感と活力が存在し、古よりトゥルファンで崇められた舞と濃厚な郷土生活の息吹を感じ取ることができる。

以上アスターナ出土の「莊園生活図」、「宴飲図」、「宴楽図」の三幅の紙画をみてきたが、孟凡人氏はこれらを随葬品の一種であるとし、⁽²⁷⁾王素氏は壁画制作の粉本であるとする。⁽²⁸⁾本稿では、技法の水準がカラホージャ古墓の壁画よりも高度であり、また後述する木棺側板に貼られる玉門の紙画と比した結果、これら三幅の紙画は孟氏と同様に随葬芸術品の一種であると考える。また年代についても、趙華氏は東晋時期であるとし、⁽²⁹⁾王素氏は西晋時期であるとし、⁽³⁰⁾そして孟凡人氏は十六国時期のおよそ四世紀中葉であるとしている。⁽³¹⁾これについてはカラホージャ古墓の壁画と玉門の魏晋時期の紙画を参考にする他、トゥルファン地区の西晋から十六国時期の文化経済水準と当時の文書内容を考慮すると、十六国時代のうちの前凉がトゥルファンを統治していた時期、即ち三世紀末から四世紀前半とするのが妥当であると考える。

(二) 近年発見の古紙本絵画

i 絵画略説

官庄古墓群は甘肅省玉門鎮の西北一六・五kmにある農墾局西干渠の南四〇〇mのゴビ砂漠上にある。二〇〇三年に甘肅省文物考古研究所がこの魏晋時期墓群を発掘した際、二〇〇三GYGM一号墓

から紙本の「車馬出行図」(甘肅省文物考古研究所蔵)(図5)が出土した。⁽³²⁾これは現在までに中国で出土した紙画の中で最古のものと考えられている。この「車馬出行図」は出土時、墓の南側に存在した木棺の右側板上に貼ってあった。縦二三cm、横六四cmの純白の紙上に、美しい色彩を賦して人物、馬等を描いている。現在画面上に残っているモチーフは五人物と一馬、一篷牛車である。画面右に黒い馬と御者がおり、馬の後ろに牛車が続き、その牛車を馬と牛車の間にいる人物が先導し、牛車周囲の三人の侍従或いは御者がそれに従うという具合である。これは中国西部の辺境地域の生活の一場面を表現しており、随葬品を分析した結果、この墓の墓主は小地主であったことが分かった。

ここに描かれる人物の服飾には特色があり、牛車を先導する牽牛者と馬の御者及び画面左端の人物は、幅広の筒型の長褲を穿いている。さらに牽牛者は尖頂帽を頭にかぶり、長褲の上に腰帯を巻いている。他の二人物の服飾は判然としないが、恐らく皆同じような姿をしていたのだろう。そしてこの服飾は中国西部地域の民族に特有のものである。

この紙画は運筆に抑揚がなく、形状の変化にも乏しい。着色は黒と黄の二色を基調とし、淡い赤色も併せて用いる。描き方は黒の線による鈎勒填彩を基本としている。人物描写の場合、細い線による線描が主で、部分的に黄や赤を賦している。牛車は、車体を黒で平塗した上に淡い赤色で裝飾を施し、篷を張る柱には黒、黄、赤の三色を用い、車体の前後に掛けられる幕には黄色を使う。牛の身体は黄色で平塗した後に淡い赤色を軽く施し、角と四肢は黒一色で描か

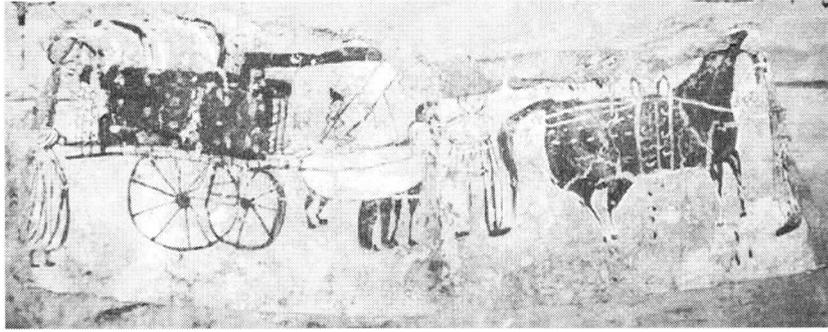


図5 車馬出行図 西晋 紙本着色 64.0×23.0cm 甘肅玉門官庄
1号墓出土 蘭州市、甘肅省文物考古研究所蔵 (上：出土時、
下：補修後)

れる。馬の場合は、全体的に黒で平塗するが馬体と鞍の輪郭線、鞍の装飾には黄色を使い、暈染の効果を持たせている。

全体として運筆及び色づかいは明快でなく暗い印象があり、モチーフ間の大きさのバランスが不自然で、人や牛馬の脚が細く線条化しており、紙画の原始的形態を表す。しかし、二〇世紀になってごく僅かではあるが、ようやく発見されるようになった紙画としての価値は大きい。またそれ以前に発見されていた宴飲楽舞に加えた新たな画題を提供する資料として、そして魏晋時期の西部辺境民族の服飾と生活の様子及び中国古代紙画の起源と発展の様相を明確にするための資料として貴重である。

ii 画格と年代

車馬出行という画題は中原における漢代、特に後漢以来の地主豪族の生活から取材したものである。そして玉門官庄古墓群二〇〇三GYM一号墓から出土した「車馬出行図」は構図、線、着色において陝北、河北の漢墓壁画の「車馬出行図」と非常に類似している。

一九七三年に甘肅省エチナ河中流域の肩水金関遺址(一九七九年以降、内モンゴル自治区の管轄下に入る)で出土した前漢の木板画には樹下に人物と馬がい

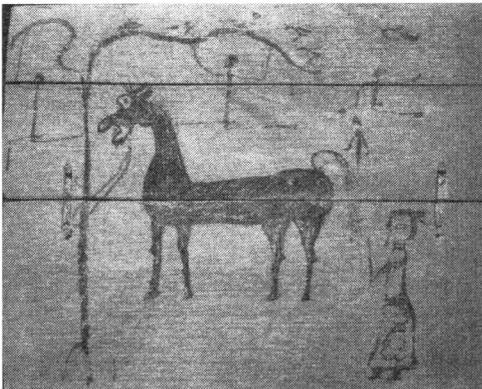


図6 樹下馬・人物図 前漢 板絵墨画
25.0×20.0cm 内モンゴルエチナ
肩水金関遺址出土 蘭州市、甘肅
省文物考古研究所蔵

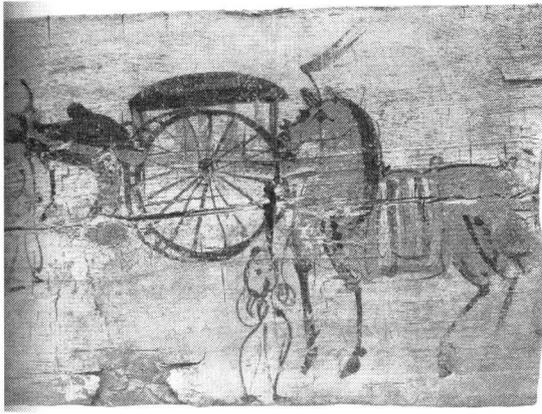


図8 車馬出行図 西晋元康元年(291) 板
絵着色 32×23cm 高台县駱駝城西晋墓
出土 甘肅省、高台县博物館蔵

出土の彩絵木棺左側板に描かれた「車馬出行図」⁽³⁴⁾、一九九八年甘肅高台駱駝城西晋墓で発見された木棺板画(図8)が挙げられる。このうち高台駱駝城西晋墓からは西晋元康元年(二九一)の紀年を有する旌が出土しており、木板画の制作年代が三

る様子(図6)が描かれており、これに似たものが前述のアスタールナ一三号墓の紙画にも描かれている(図7)。これらの絵画はまた官庄古墓と同様に線描を基本として所々に色を補って描かれている。画格は非常に単純で古拙であり、ふとすると滑稽な印象さえ観者に与える。しかし玉門の紙画と比べるとアスタールの紙画の方が、筆致が細かく、構図と彩色においても優れている。他に技法の面で官庄古墓と



図7 樹下鞍馬人物図(図3 莊園生活図部分)

近しいものとして、一九九七年発掘の北魏五世紀の山西大同智家堡墓出土の彩絵木棺左側板に描かれた「車馬出行図」⁽³⁴⁾、一九九八年甘肅高台駱駝城西晋墓で発見された木棺板画(図8)が挙げられる。このうち高台駱駝城西晋墓からは西晋元康元年(二九一)の紀年を有する旌が出土しており、木板画の制作年代が三世紀中後期であることが分かっている。⁽³⁵⁾「牛車図」は、一九一五年にスタインによって発見されたアスタールナ古墓群第六区三号墓の紙画、一九七二年から七三年にかけて発掘された甘肅嘉峪関七号墓、一九七五年に発掘されたカラホージャ古墓群九七号墓と九八号墓から出土した壁画にみられる。このうち甘肅嘉峪関七号墓のものは、前室四壁の磚上に描かれた「莊園図」の上から数えて第三層目に「出行図」の一部として描かれ(図9)、⁽³⁶⁾カラホージャのものは墓室北壁の「莊園図」壁画中に鞍馬と共に描かれる(図10)⁽³⁷⁾。時代はそれぞれ西晋代、十六国の北凉期(二九七〜四三九)である。これらの「牛車図」はいずれも官庄古墓群のものと同様に似ている。

魏晋時期以降、「出行図」中の「牛車図」では、御者を車上に乗せるのではなく牛の前に置いて牛を牽くようにし、更に牛車に幕をつけて描くようになる。⁽³⁸⁾遼寧遼陽上王家西晋墓壁画の「出行図」⁽³⁹⁾、西凉(四〇〇〜四二二)又は北凉時期の酒泉丁家閘五号墓前室西壁右側の「出行図」⁽⁴⁰⁾、そして玉門官庄古墓群の「車馬出行図」等の中に描かれる牛車は全てこの特徴を有している。

構図の面で官庄古墓群の「車馬出行図」と類似しているものとしては、一九八三年遼寧遼陽旧城東門発見の後漢中晩期の壁画墓墓室西壁に描かれていた「車馬出行図」⁽⁴¹⁾、吉林省集安市発見の四世紀末の角抵塚後室左側壁の「鞍馬人物図」⁽⁴²⁾が挙げられる。前者は御者が鞍馬を牽き、その後ろに幕を掛けた牛車が続くという点において、後者は画面左から右に向かって車馬が進行する点においてそれぞれ類似する。そして角抵塚の場合、牛車、鞍馬、人物を三本の大きな

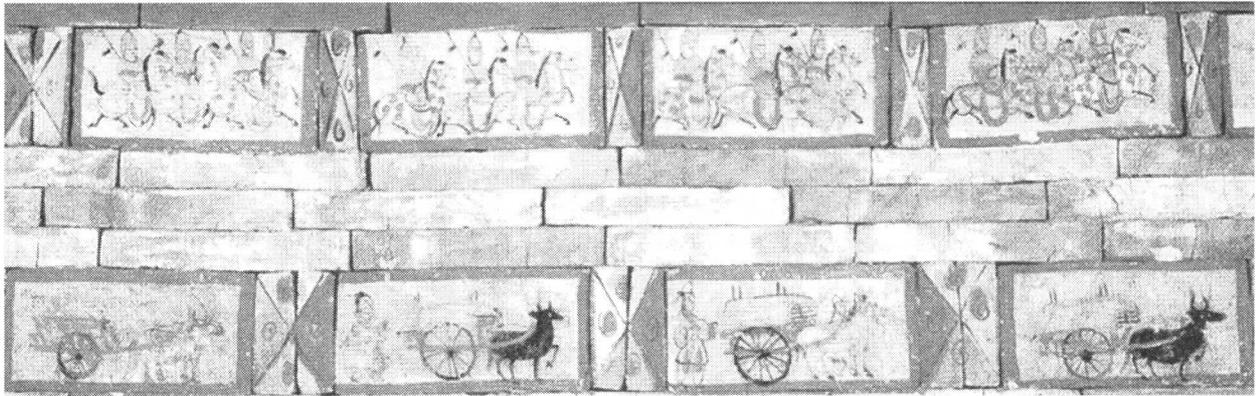


図9 車馬出行図（部分） 西晋・約3世紀 壁画 原図200.0×300.0cm
 甘肅省嘉峪関市7号墓出土、前室西壁部分 甘肅省、嘉峪関市文物管理所

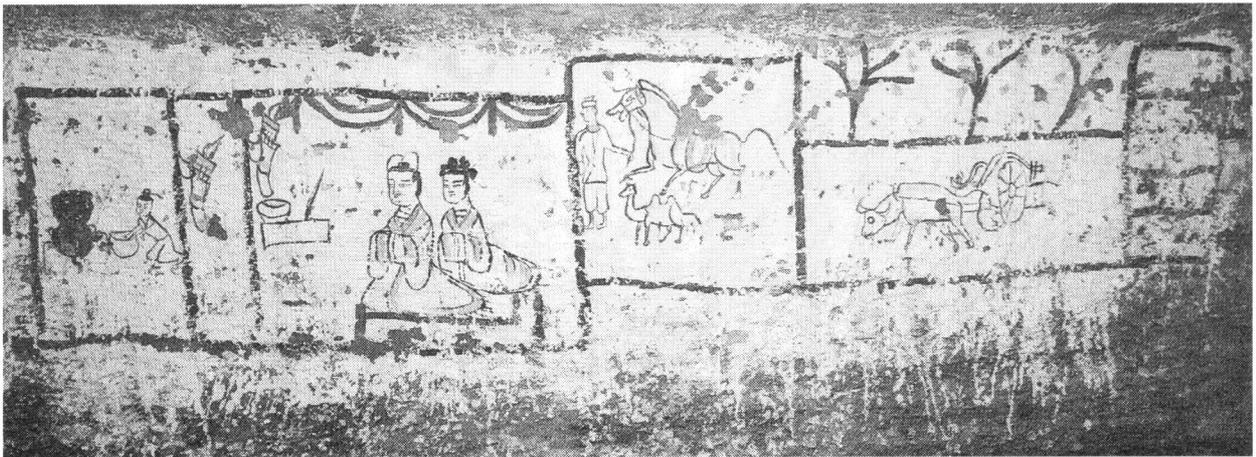


図10 荘園生活図 北凉・4世紀後半 壁画 55.0×220.0cm
 新疆トウルファン市カラホージャ97号墓出土

果樹の下に表すようなアスターナ一三号墓等と同様の特徴も持っている。また四〇九年造の徳興里古墳後甬道東西壁にも「出行図」(図11)⁴³⁾が描かれるが、ここでは上段に牛車、下段に鞍馬というように、上下に画面を区切っている。これらの画の間には、一〇〇年近い制作年代差と地域差による影響は存在しない。

他に車馬関係の出土品として、二〇〇一年五月に陝西省咸陽市秦都区平陵郷で発見された十六国時代の前秦期(三五二—三九六)或いは後秦期(三八四—四一七)のM一号墓から出土した陶製の車馬と鞍馬がある。⁴⁴⁾これらの作品は色彩が非常に美しいが、造形は奇怪である。

以上述べたことと随葬品の分析から判断して、玉門官庄古墓群の紙絵《車馬出行図》の制作年代はトゥルフアンの紙画よりやや早く、当に魏晋期から十六国時代前期、即ち三世紀中後期から四世紀初とすべきである。⁴⁵⁾

(三) 画題と技法の比較

i 紙画間の比較

ここまで四幅の紙画作品についてみてきたが、いずれの作品も西晋時代から十六国時代の豪族、地主達の宴飲遊楽の生活の様子を表現していた。これらの作品は当時の上層社会の情趣と理想を我々に伝え、またトゥルフアン地域の社会風貌と思想観念を理解する上で象徴的資料となり得る。そしてこれらの作品を参考にすると、魏晋十六国時代に宴飲遊楽の場面、即ち现实生活中の事柄を絵画の題材にすることが流行したことを理解できる。漢代中原地区の絵画は倫理、道德の説教に關係した場面を画題として選んでおり、現実生

活を画題にすることは魏晋十六国時期に起きた画題の一大変化といえる。加えてアスターナ古墓群から出土した絵画においては、文書と同様に歴史様相をも語り、それは文字による情報よりも更に明確なものである。

構図については、アスターナ一三号墓の「莊園生活図」と第六区三号墓の「宴楽図」は非常に複雑であるが、他の二幅は比較的単純である。アスターナ一三号墓の「莊園生活図」は樹木によつて場面を区切り、燕居、厨房、鞍馬出行、農事の四種類の生活場面を同一画面に整然と組み合わせる。全体としてのモチーフの配置はまちまちであるが、おもしろみがあり、それは意図して行われている。描く上での規則は無いが、無秩序でもないという印象を受ける。アスターナ第六区三号墓の「宴楽図」は幔、井戸を描き、進酒、舞楽、厨房の諸場面を有機的に庭園場景中に織り交ぜることに成功している。一三号墓の「莊園生活図」と第六区三号墓の「宴楽図」は、それぞれ画面右上、画面中部の左側に描かれた四角の囲みの中に田圃を描いており、付近に農具も表している。それらは非常に類似しており、とりわけ第六区三号墓の「宴楽図」の田圃は囲みの中に描かれているため、ここに二重空間の効果が生まれており、画家の独創性が見受けられる。他の二幅については、衣服や身の回り品を用いて画面を分けている以外に工夫がなく、厨事、食事、車馬出行等の場面を単調に描いている。

彩色の面から言えば、四幅は全て墨画着色であり、赤、白、緑、黒、茶褐、黄等の色が用いられている。鉤勒填彩が多く行われており、暈取りで効果を出す方法はあまり見られない。トゥルフアンの

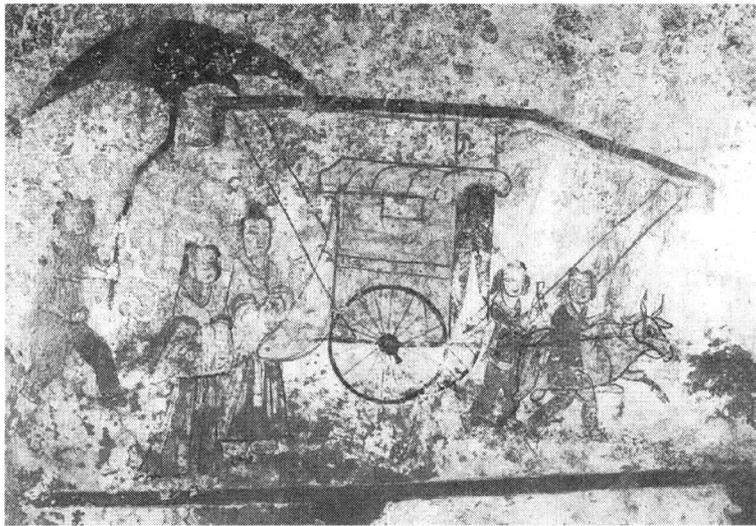


图11 車馬出行図（上：描起し図、中：牛車、下：鞍馬人物）409年
壁画 137.0×90.0cm 北朝鮮徳興里壁画墓出土、甬道東壁部分

三作品の人物の輪郭線は非常に精緻で均整が取れているが、玉門の紙画は運筆が簡略化されており、人物と鞍馬の大きさのバランスも不自然である。しかしこれらの作品はいずれも写実を基礎とし、趣を出すことを重視しており、絵画技法の真髓を伝えることは注目し値する。そして人物の顔の表情と鞍馬の様子も画面を引き立たせている。

他に四幅を総観して言えることは、いずれも画題を現実生活から取材しており、床榻、調理道具、鞍馬、牛車等の共通のモチーフが描かれているということである。これらのものは当時の社会の風俗、習慣、生活の様子を理解するための参考資料としての価値を有している。トゥルファン・アスターナ古墓群出土の三幅の紙画には、いずれも主人が床榻上に跏坐して描かれ、ここに当時の日常生活を垣間見ることができるといえる。同様にこの三幅にはまた厨房での宴を準備する場景が描かれており、その中の調理道具は同時代の墓の随葬品中にも見られ、これらから当時の手工業の一面を知ることができるといえる。またそれぞれの紙画に登場する人物の服飾は異なり、これは多民族が共生していたトゥルファンの状況を反映している。牛車については、トゥルファンの「宴楽図」と玉門の「車馬出行図」中に登場するものは極めて類似している。

ii 紙画と壁画の比較

以上の四幅の紙画のうちトゥルファン・アスターナ古墓群出土の三幅は、画題、構図や技法において、アスターナ付近のカラホージヤ古墓群の七五TKM九六、七五TKM九七、七五TKM九八から出土した北凉時期の壁画と基本的に一致している。⁽⁴⁶⁾ また甘粛酒泉、

嘉峪関出土の壁画と磚画⁽⁴⁷⁾、遼寧遼陽王家村東晋墓の壁画とも非常に近い。⁽⁴⁸⁾ 孟凡人氏の論述によると、トゥルファンの壁画と紙画の画題は基本的に同じで、構図と技法においてやや異なり、全体的な芸術水準は壁画よりも紙画の方が上である。そしてその紙画、壁画は共に源が河西及び中原にあり、⁽⁴⁹⁾ 河西の酒泉、嘉峪関一帯の魏晋時期の墓葬壁画と淵源関係にある。また部分的な図像は敦煌仏爺廟湾西晋画像磚墓の壁画と近い要素を持っている。進食図等がそれにあたる。⁽⁵⁰⁾ これらのことから、河西とトゥルファンの魏晋時期の墓葬壁画と紙画は、鞍馬牛車出行、家居宴楽、庖厨、農事等の現実生活から取材した画題及び運筆の技法において共通しており、絵画芸術の地域性と時代性を反映しているといえる。

墓葬壁画、紙画中には家居図、農事図、出行図等が見られるが、一作品中にこれらの画題が全て表されることはない。これは互いの作品が内容を補い合っており、共に西晋から十六国時期の河西とトゥルファン地区即ち西北地域一帯の完璧な豪族莊園生活画卷を構成するからである。

四. まとめ

以上述べてきた中国における古代紙画の発見地域、画格及び制作年代等に関して以下簡単ではあるがまとめてみる。

古紙、紙文書、紙画の出土地域は、現在気候が比較的乾燥している甘粛、新疆等の西北地域に限定されている。もしかすると漢魏時期に政治、経済、文化が発達していた中原地域には西北地域よりも

早い時期に紙画があったかもしれないが、湿潤な自然環境等の影響で現在に形を残すものの発見は困難である。

これまでの古紙と紙文書及び紙画の出土例から、紙文書が紙画よりも早い時期に出現しており、紙文書は前漢前期末に、紙画は後漢中晩期から三世紀中後期の曹魏時期にそれぞれ世に現れたと現在一般に考えられている。しかし、前漢において既に紙が使用されていたという事実と早期の年紀が入っている紙文書を根拠にすると、紙画と紙文書は正に同時期に出現し、紙画の小作品に至っては紙文書よりも幾ばくか早く出現していたとも推定できる。

漢末から西晋・東晋にかけての時代は、書画の支持体の大変換期であった。これ以前は竹木の簡牘と絹帛が主な支持体であったが、およそ東晋以後には紙を使用することが多く行われるようになり、徐々に書画の伝統的な支持体としての地位を固めていった。この点から西晋時期には既に絵画に紙が用いられる条件は完全に整っており、紙画出現時期の下限は三世紀中後期、四世紀初の西晋時期と考えるのが最も適当であろう。そしてこの時期は麻紙が主に用いられていた。

最後に古紙画の画題、画格と技法についてまとめてみる。画題は当時の日常生活から取材しており、豪族地主達の舞楽宴飲、車馬出行、農事、庖厨等の場景が採用され、荘園生活のめでたく平和な様子を再現している。技法は単純で古拙であり、画格は質朴である。しかし同時代の墓葬壁画の技法にはやや勝っており、運筆は比較的に熟達し、線の太さは使い分けられ、彩色も多様に変化に富む。その上暈染という手法も用いられている。

以上、古代の紙画について主に考古発見された作品をみながら述べた。しかし不備な点が多々あると思われる、関係方面のご教示を仰ぐことができれば幸いである。

註

(1) 『中国木簡古墓文物展』(図録) 甘肅省文物考古研究所、毎日新聞社、一九九四年。甘肅省文物局主編『甘肅文物精華』図十一、文物出版社、二〇〇六年。

(2) 洪惠鎮「試論中国画的材料改革」、『美術觀察』二〇〇一年第四期、四九〜五二頁。上記の論文中で洪惠鎮氏は以下のように述べている。中国画制作には墨を主体として膠性顔料を用いる系統と希釈剤に水を使用する絵具を用いる系統があるが、これらは基本的に二〇〇〇余年間大きく変化することなく続いてきた。反対に支持体として何を使うのかということは何度も変化した。およそ戦国時代から絹帛画が制作されるようになり、五代兩宋の時代から絹帛を以って支持体の主とするようになった。元代以降には紙が絹に取って代わり、紙が次第に主要な地位を占めるようになり、絹が紙に次ぐ支持体となった。

(3) 『芸術類聚』卷五八。

(4) 『古今図書集成 理学編 字字典』卷一五三、紙部。

(5) 甘肅省文物考古研究所「甘肅敦煌漢代懸泉置遺址発掘簡報」、『文物』二〇〇〇年第五期、四〜二〇頁。

(6) 侯燦、楊代欣編著『樓蘭漢文簡紙文書集成』卷一〜三、天地出版社、一九九九年。

(7) 『シルクロード大美術展』(図録) 図四七、四八、東京国立博物館、一九九六年。

(8) 『書の至宝—日本と中国—』(図録) 図二五、東京国立博物館、朝日新聞社、

- 二〇〇六年。
- (9) 松本伸之監修『新シルクロード—幻の都 楼蘭から永遠の都 西安へ—』図四九、産経新聞社、二〇〇五年。
- (10) 唐長孺「新出吐魯番文書発掘整理経過及文書簡介」、『東方学报』京都第五四冊、一九八二年。
- (11) 新疆维吾尔自治区博物館編『新疆出土文物』図四六、文物出版社、一九七五年。上記の著作によると残存している部分の大きさは縦二三・〇cm、横七二・六cmであり、材質は高級麻紙である。
- (12) 黄文弼『吐魯番考古記』図版一八—二二、二二二、中国科学院出版社、一九五四年。
- (13) 唐・智升「開元釈教録」、『大正蔵』第五五卷。任継愈『漢唐仏教思想論集』(第二版) 人民出版社、一九七三年、四頁。
- (14) 池田温『中国古代写本識語集録』(東洋文化研究所叢刊 第一一輯) 大蔵出版、一九九〇年、七四頁。
- (15) 香川黙識編『西域考古図譜』巻下、国華社、一九一五年、一頁。池田温『中国古代写本識語集録』(東洋文化研究所叢刊 第一一輯) 図一、大蔵出版、一九九〇年。陳国燦「從敦煌吐魯番所出早期写経看仏教的東伝西漸」、鄭炳林主編『敦煌仏教芸術文化国際學術研討會論文集』所収、蘭州大学出版社、二〇〇二年。
- (16) 季羨林主編『敦煌学大辞典』敦煌遺書条(姜伯勤撰)、上海辞書出版社、一九九八年、一四〇—一七頁。
- (17) 金維諾主編『中国美術全集』絵画編二隋唐五代絵画、図二五、人民美術出版社、一九八四年。
- (18) 潘吉星氏は以下のように述べている。「絵画に紙を用いる要求が非常に高まった。しかし、漢晋、隋唐では絹を用いての作画が多く為された。唐代から紙本絵画が登場したが、未だ多くは行われなかった。紙本の作画が大量に行われるようになったのは宋元時代からであり、使われていたもの多くは皮料紙であった。」(潘吉星『中国造纸技術史稿』文物出版社、一九七九年、一〇〇頁。潘吉星著、佐藤武敏訳『中国製紙技術史』(日本語版) 平凡社、一九八〇年、一八一頁。) また洪恵鎮氏も以下の論文で、後漢の宦官蔡倫が発明した製紙技術から推測して、早期の紙は作画に適さなく、中国画が紙上に描かれるようになったのは魏晋時代よりも早い時期であることはあり得ないと考え、また元代以降に紙を用いた作画が大量に行われるようになったことを解明した。洪恵鎮「試論中国画的材料改革」、『美術觀察』二〇〇一年第四期、四九〇—五二頁。
- (19) 金維諾主編『中国美術全集』絵画編二隋唐五代絵画、図一一、人民美術出版社、一九八四年。
- (20) これについて孟凡人、趙華、王素の三氏は早くから専門の論文を書いている。本稿では作品の部分的な内容を詳細に述べることはしない。
- (21) 新疆维吾尔自治区博物館「吐魯番県阿斯塔那—哈拉和卓古墓群発掘簡報」、『文物』一九七三年第十期、七〇—七二頁。新疆维吾尔自治区博物館編『新疆出土文物』図四七、文物出版社、一九七五年。新疆文物局他主編『新疆文物古迹大観』図〇三三四、新疆美術摄影出版社、一九九九年。
- (22) 王素氏は鞍馬と御者後方に並べてある四つものものについて考察したが、それは趙華氏の解釈とは異なるものである。即ち左から順に曲蓋、節、麾、幢とし、これらは権力と身分の象徴であるとされた。この図は東晋冬寿墓(洪晴玉「関于冬寿墓的発現和研究」、『考古』一九五九年第一期、二七頁。)と霍承嗣墓(雲南省文物工作队「雲南省昭通后海子東晋壁画墓清理簡報」、『文物』一九六三年第一二期、一〇—一六頁。)の壁画のものと類似している。
- (23) 孟凡人「吐魯番十六国時期的墓葬壁画和紙画略説」(趙華主編『吐魯番古墓葬出土芸術品』所収、新疆美術摄影出版社、一九九四年。孟凡人『新疆考古与史地論集』所収、科学出版社、二〇〇〇年)。
- (24) 王素「吐魯番出土「地主生活」新探」、『文物』一九九四年第八期、九〇—九二頁。
- (25) STEIN (Aurel), *Innermost Asia*, 2 vol., Oxford, 1981. スタインは一九一五年のアスターナ古墓群発掘において十六国時代の壁画墓四座を発見した。その

うち紙画を有してゐた墓の番号は上記の著書において、Ast.:ii.1.01+03, Ast.:ii.1.02, Ast.:ii.1.01+03等とやれてゐる。またその図版は以下の著書に収録されてゐる。STEIN (Aurel), *Innermost Asia*, 3 vol., Oxford, 1981.

- (26) 前掲註(25)と同じ。また「宴飲図」のカラー図版は以下の著作に収録されている。穆舜英『中国新疆古代藝術』図二二〇、新疆美術摄影出版社、一九九四年。
- (27) 前掲註(23)と同じ。
- (28) 王素『吐魯番晋十六国墓葬所出紙画和壁画』、『文物天地』一九九二年第四期、二八頁。
- (29) 趙華『新疆古代絵画「地主生活図」』、『新疆芸術』一九八五年第三期。同氏「吐魯番東晋时期的墓室壁画」、『新疆文物』一九九二年第二期。
- (30) 前掲註(24)と同じ。
- (31) 前掲註(23)と同じ。
- (32) 甘肅省文物考古研究所「甘肅玉門官庄魏晋墓葬発掘簡報」、『考古与文物』二〇〇五年第六期、一〇一～一五頁。
- (33) 甘肅居延考古隊「居延漢代遺址的発掘和新出土的簡冊文物」、『文物』一九七八年第一期、一～二五頁。張安治主編『中国美術全集』絵画編一原始至南北朝絵画、図六六、人民美術出版社、一九八六年。
- (34) 劉俊喜、高峰「大同智家堡北魏墓棺板画」、『文物』二〇〇四年第十二期、三五～四七頁。
- (35) 甘肅省文物局編『甘肅文物精華』図一九五、文物出版社、二〇〇六年。
- (36) 甘肅省文物隊、甘肅省博物館、嘉峪関市文物管理所「嘉峪関壁画墓発掘報告』文物出版社、一九八五年。宿白主編『中国美術全集』絵画編一二墓室壁画、図三九、文物出版社、一九八九年。
- (37) 新疆博物館考古隊「吐魯番哈拉和卓古墓群発掘簡報」、『文物』一九七八年第六期、一～九頁。宿白主編『中国美術全集』絵画編一二墓室壁画、図五二、文物出版社、一九八九年。
- (38) 中国大百科全書総編輯委員会「考古学」編集委員会編『中国大百科全書・考

古卷』(初版)中国大百科全書出版社、一九九二年、二七八～二七九頁。

- (39) 李慶発「遼陽上王家村晋代壁画墓清理簡報」、『文物』一九五九年第七期、六〇～六二頁。
- (40) 甘肅省文物考古研究所「酒泉十六国墓壁画』文物出版社、一九八九年。
- (41) 遼寧省博物館、遼陽博物館「遼寧遼陽旧城東門里壁画墓」、『文物』一九八五年第六期、二五～四二頁。
- (42) 池内宏、梅原未治『通溝』卷下、図四四、国書刊行会、一九七三年。
- (43) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院、朝鮮画報社編『德興里高句麗壁画古墳』(第二版)挿図一四、講談社、一九八六年。平山郁夫総監修『高句麗壁画古墳』図八七、八八、共同通信社、二〇〇五年。
- (44) 咸陽市文物考古研究所「咸陽平陵十六国墓清理簡報」、『文物』二〇〇四年第八期、四～二八頁。
- (45) 前掲註(32) 甘肅省文物考古研究所報告書参照。報告書では「西晋晚期から十六国時代の四世紀中葉とすべきである」と述べられている。
- (46) 前掲註(37) 新疆博物館考古隊報告書参照。
- (47) 甘肅省博物館「酒泉嘉峪関晋墓的発掘」、『文物』一九七九年第六期、一～一六頁。宿白主編『中国美術全集』絵画編一二墓室壁画、図三九、文物出版社、一九八九年。
- (48) アスターナ第一三号墓の紙画で、墓主が覆斗帳の下で扇を持って床榻上に坐っている構図とそれを描く技法は遼陽晋墓の壁画中に描かれているものと非常に類似している。これについては以下の論文を参照。李慶発「遼陽上王家村晋代壁画墓清理簡報」、『文物』一九五九年第七期。また鄭岩氏は遼陽上王家村壁画墓を西晋時期のものとしている。これについては以下の著書を参照。鄭岩『魏晋南北朝壁画墓研究』文物出版社、二〇〇二年、三〇～三三頁。
- (49) 孟凡人氏はトゥルフアン地域出土の十六国墓壁画、紙画と酒泉丁家閭五号墓壁画を詳細に比較検討しているが、それについては本稿では省略する。
- (50) 一九九五年発掘の第三七号墓墓室西壁南側の画像磚の「進食図」のように、画題が一致するものがある。これについては以下の著書を参照。甘肅省文物考

古研究所、戴春陽主編『敦煌仏爺廟灣西晋画像磚墓』文物出版社、一九九八年。

【図版出典】

- 図1 甘肅省文物局主編『甘肅文物精華』図十一、文物出版社、二〇〇六年。
図2 松本伸之監修『新シルクロード―幻の都 楼蘭から永遠の都 西安へ―』図四九、産経新聞社、二〇〇五年。
図3・図7 新疆文物局他主編『新疆文物古迹大観』図〇三三四、新疆美術摄影出版社、一九九九年。
図4 穆舜英『中国新疆古代藝術』図二二〇、新疆美術摄影出版社、一九九四年。
図5 (出土時) 甘肅省文物考古研究所西氣東輸工程考古隊によって二〇〇三年に撮影。
図5 (補修後) 甘肅省文物考古研究所「甘肅玉門官庄魏晋墓葬発掘簡報」表紙図版、『考古与文物』二〇〇五年第六期、一〇～一五頁。
図6 張安治主編『中国美術全集』絵画編一原始至南北朝絵画、図六六、人民美術出版社、一九八六年。
図8 甘肅省文物局編『甘肅文物精華』図一九五、文物出版社、二〇〇六年。
図9 宿白主編『中国美術全集』絵画編一二墓室壁画、図三九、文物出版社、一九八九年。
図10 宿白主編『中国美術全集』絵画編一二墓室壁画、図五二、文物出版社、一九八九年。
図11 (描起し図) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学学院、朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』(第二版) 挿図一四、講談社、一九八六年。
図11 (牛車、鞍馬人物) 平山郁夫総監修『高句麗壁画古墳』図八七、八八、共同通信社、二〇〇五年。(田林啓訳)

王 元林 (おう・げんりん)

一九九七年 北京大学考古学部卒業

二〇〇六年 神戸大学文学研究科修了

現在、甘肅省文物考古研究所研究員、神戸大学文化科学研究科在学中